
暗い朝

るうね

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

暗い朝

【Nコード】

N01960

【作者名】

るうね

【あらすじ】

「ねえ、パパ。今日もお庭の花はきれいに咲いている?」

「ねえ、パパ。今日もお庭の花はきれいに咲いている？」

わたしの問いかけに、

「咲いているよ、ジェニファー」

優しい声が答える。

「赤に黄色に白。どれも、みんなきれいだ。おや、チョウチョが飛んでいる。花の匂いに誘われて、やってきたのかな」

「どんなチョウチョ？」

「白くて、羽に水玉模様のあるチョウチョさ」

「すてき！」

わたしは、その光景を思い浮かべる。色とりどりの花の中を、水玉模様のチョウチョがひらひらと飛んでいく。花もチョウチョも見ただことはないけど、パパがどんなものか説明してくれたので、想像はできる。でも、それはやっぱり想像でしかなく、細かい部分になると、よく分からない。

「あーあ、わたしも目が見えたらいいのに」

言ってから、しまったと思った。案の定、パパは哀しそうな声で、「ジェニファー、そんなことを言うもんじゃない。たしかに君の目は見えないけれど、それを悲観して生きるようなことはして欲しくないんだ」

「分かってるわ。ごめんなさい、パパ」

それでも、わたしは、想像でなく、自分の目で花やチョウチョを見たいという望みを捨てきれない。

「目が見えるようになりたいかい？」

ある夜、ベッドに入ったわたしの耳に、そんな声が聞こえてきた。
「だれ？」

「誰でもいいさ」

声はそう答え、

「目が見えるようになりたいんだらう？ その望み、叶えてやろうか」

「目を？」

「見えるようにしてやるよ。お前さんが、望むのなら」

わたしは混乱した。この声の主は誰だらう？

「お医者さま？」

「そうかもね。さあ、どうするかい？ 自分の目で、この美しい世界を見ることができるようになるか。それとも、一生暗闇の中で生きていくか」

……そんなもの。答えは決まっている。目が見えるようになりたい。花やチョウチョを、自分の目で確かめたい。でも。

パパは、なんて言うだろう。

「なんだいなんだい」

声がいらついたように言う。

「目が見えるようになりたいくないんだね？」

「ま、待って！」

「もういいよ。明日の晩、また来る。その時がラストチャンスだよ」
そう言って、声は消えた。

「おはよう、ジェニファー」

パパの声で、目が覚める。

「ん……おはよう、パパ」

「今日も花はきれいに咲いているよ」

「そう」

わたしは上の空だった。昨晚の声を思い出す。目が見えるようにしてやろうか。

「ねえ、パパ」

「なんだい？」

「もし、わたしの目が見えるようになるかもしれない、って言った
らどうする？」

――ダメダ

それは、ぞっとするほど冷たい声だった。いつも優しいパパの声
とは思えない。

「だめだ、ジェニファー。そんなことを言っては」

わたしは、何も言葉を返せなかった。

「ジェニファー。君は目が見えるようになってはいけない。見ては
いけない」

パパの声は冷たい異音のまま。

「ど、」

わたしは、なんとか声を絞り出す。

「どうして、パパ」

「どうしてもだ」

理由を問うことすら許さない。声音が、全てを拒絶している。
ぶーん、と。

虫の羽音のような。

そんな音が、遠くに聞こえた。

ベッドの下で、うぞうぞと何かが蠢うごめいている。

嫌な臭いが、ツンと鼻を突いた。

「二度と、目が見えるようになりたいなんて、そんなことを考えて
はいけないよ」

パパの声。一段と臭気が増し、虫の羽音やベッドの下で何かが蠢
く音も大きくなってきていた。

「……うん」

わたしはうなずく。うなずくしかなかった。

「さあ、朝ごはんにしようか」
そう言ったパパの声は、普段通り、優しいものだった。
臭気は失せ、虫の羽音やベッドの下で蠢く気配も消えている。

「君のパパも、ずいぶんひどい人だねえ」
ベッドに入ると、いきなり昨日の声がした。

「ずっと、君の目が見えない方がいい、だなんてさ。見えた方が、
いいに決まっているのに。さあ、」

と、声は促す。^{うなが}

「もうあんな奴に気がねする必要はない。心は決まったかい？」
「……ええ」

わたしが口を開くと、声は嬉々として、

「それじゃあ、今すぐに」

「違うの」

わたしが首を振ると、声に怪訝^{けげん}そうな色が混じる。

「違う？」

「わたし、目が見えないままでいい」

「な、」

一瞬、声が絶句する。

「なにを言ってるんだ。見えないものが見えるようになるんだよ。

色とりどりの花だって、きれいな水玉模様をしたチョウチョだって」

「そうね。わたしもこの目で見たいけど……パパがあそこまで言う

からには、きっとわたしは目が見えないままの方がいいんだと思う」

「なにを、なにを馬鹿な」

「だって、わたしが今まで生きてこれたのは、パパのおかげだもの。
パパが絶対にダメだと言うのなら、たぶんそれは、しない方がいい
ことなのよ」

声が黙り込んだ。こちらを、じっと見つめている気配。やがて、
小さく舌打ちの音がして、気配は消えた。

わたしは、ふう、と息を吐く。すぐに睡魔が襲ってきた。

その夜、わたしは色とりどりの花園の中を飛び回るチヨウチヨの夢を見た。

やはり、細部はボケていたけれど。

そしてまた、暗い朝がやって来る。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0196o/>

暗い朝

2010年10月11日03時00分発行